**沢田　としき（さわだ・としき）**

**１、プロフィール**

イラストレーター、絵本作家、ステージ美術、ライブペインティング、打楽器ジェンベ演奏など多彩な活躍をするが、平成22年、急性骨髄性白血病により51歳の若さで死去。

＜生没＞

1959（昭和34）年１月17日～2010（平成22）年４月27日

＜代表作＞

『アフリカの音』（講談社、平成8年日本絵本賞）　『てではなそう　きらきら』（さとうけいこ文、小学館、14年日本絵本賞読者賞）　『ピリカ、おかあさんへの旅』（越智典子文、福音館書店、19年児童福祉文化賞）　『ほろづき』（岩崎書店）　『ちきゅうのうえで』（教育画劇）など

＜青森との関わり＞

外ヶ浜町に生まれ、大間町、むつ市を経て青森市に住む。青森市立沖館小、沖館中、県立青森北高校を卒業。

**２、作家解説**

本名・澤田俊樹（さわだとしき）。昭和34年東津軽郡蟹田町（現外ヶ浜町）に生まれ、営林署勤務の父親の転勤に伴い下北郡を経て、小学生の頃から青森市に住む。県立青森北高校では美術部に所属し、バンドを組んでギターを弾いていた。

阿佐ヶ谷美術専門学校ビジュアルデザイン科卒業、昭和56年黒田征太郎・長友啓典のデザイン会社Ｋ2に勤務。59年フリーのイラストレーターとして独立し、100冊を超える本の表紙・挿絵・装丁、CDジャケット、ポスター、ステージ美術などを手がけた。

56年『ガロ』掲載の作品を収めたコミックス集『Blues』を自費出版。59年『ウィークエンド』、61年『街角パラダイス』、平成2年画集『PINK&BLUE』などを出版。

平成８年、初めて取り組んだ創作絵本『アフリカの音』が日本絵本賞受賞。生涯のテーマ「命のつながり」の出発点となった。２冊目は、曽祖母をモデルにした『ほろづき』（13年）。「２つの舞台は遠く離れているが、命の営みは同じ」との思いから生まれた。創作絵本はほかに、『ひとりぼっちのだいだらぼっち』（16年）、『ちきゅうのうえで』（17年）。「青森の豊かな自然、ねぶたの極彩色や太鼓の音が、自分の原点」と語った。

また作家と組んだ絵本には、『土のふえ』（今西祐行、10年）、『つきよのくじら』（戸田和代、11年）、『エンザロ村のかまど』（さくまゆみこ、16年）、『ピリカ、おかあさんへの旅』（越智典子、18年）、『みさき』（内田麟太郎、21年）、手話絵本『てではなそう』（さとうけいこ）シリーズなど数多く、高い評価を得た。寺村摩耶子著『絵本の子どもたち　14人の絵本作家の世界』（水声社、22年）にも取り上げられている。

全国各地でワークショップや演奏に合わせて絵を描くライブペインティング、「アフリカ子どもの本プロジェクト」メンバーとしても活躍。平成９・13年青森市新町商店街の消火栓ペイント、18・19年東青地区の小学生とともに「巨大絵本づくり」を行った。

21年急性骨髄性白血病を発症し、１年の闘病後51歳で死去した。

**３、資料紹介**

〇『アフリカの音』

図書

1996（平成８）年３月10日

250㎜×260㎜

アフリカの打楽器ジェンベを愛した彼は、音楽とダンスを学ぶ目的で西アフリカのセネガルとマリに１か月間滞在。その時の体験を３年間温めて制作した、初めての創作絵本。第２回日本絵本賞を受賞。「イマジネーションの中のリアルなアフリカ」と評された。